

## 文庫訪問の心得(四)

今井, 源衛  
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/16293>

---

出版情報 : 文献探究. 5, pp.82-83, 1979-12-05. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

閲覧の上で特に注意を要するのは卷子本である。他の冊子本ならば、袋綴・列帖・粘葉・折本など書型の相違はあつても、基本的には前編に述べたことを守れば事は足りるが、巻物は少し違ふ。

卷子本の閲覧を願ひ出るならば、あらかじめ、その取扱ひについて、平常から練習しておくことがぜひ必要である。それまで一度も巻物を扱つたことがないのに、いきなり他家の巻物を開いて、見て、巻き戻すというのは、決して出来ることではない。その素養もないのに、巻物を見せてほしい、というのは、非常識とさえいえる。

といつても、もちろん特別に梁運な技術と要するものがあるはずもなく、せいぜい十回ぐらい複製本でも練習すれば、だいたいのコツはおぼえられる。

卷子披見の原則としては、他の本と同じく、まづは、終始本を机上から離さない、つまり両手で持ち上げたりしないで、机上を逐次ずらしながら読むことである。動作を強いて簡素書きにすれば、

一、机上に巻軸をタテに置く。

二、紐を解いて、表紙を開き、紐は表紙の裏の見返しのおとこに折り畳んで収めておき、天地の外にはみ出さないうようにする。

三、披見する紙面の長さは、左右両手の間隔の中に限られ、それを超えて机上に長々と引きひろげてはならぬ。つまり、卷子は両端に両手を置き添えることで、常に監視・保護されているわけである。卷子の紙の継ぎ目は、たいいていは糊が弱くなつていて、部分的にはがれたり、さらに、紙と紙とが完全に遊離していることも多い。それら

を注意ぶかく、いたわりながら取り扱うには、目の前の二個所以上の継ぎ目に同時に対応することは困難なので、つまり、三紙以上にわたつて長く披くのは無理なのである。殆どながら一言するところ一般に、世間では掛軸などは多くの家にあつて珍しくないし、その取り扱ひは、立つたまま両手で巻軸端をとらえて、ぶら下げながら巻きひろげ、巻きもどすのが普通である。また掛軸の装釘は、それに耐えるように特別強く出来ている。しかし、同じ巻物だからとて、ふつうの卷子本と掛軸と同じように扱うのは、もつてのほかである。掛軸でも大切に扱うとなれば、ぶら下げたまま開き・もどす、というのはいさしくないことというまでもない。

四、巻末まで披き終つたら、今度は逆に巻き戻すわけだが、これが初心者にはかなり難しい。自信がなければ、無理をせずに、文庫の係りの人にさういって、巻き戻してもらうほうがよい。貴重書の多い文庫では、卷子の巻き戻しは、閲覧者にはさせずに、必ず係員が行うことになつてゐる所があるので、たとへ自信があつても、いちおうは、「巻き戻しのほうはお願ひできますか」とか、「こちらで巻き戻してもよろしいですか」とか、尋ねた上にする方が無難であろう。しかし、係員が側にいなければ、自分でするほかはないが、その隙気をつけることは、巻軸を指でつまんで回してはならないということである。巻軸をつまんで紙を巻きしめると、堅くしまるのはたしかであるが、それによつて、紙面がこすれて、絵巻物や絵詞など絵具の落剥が起きたり、継ぎ目がはがれたり、極端な場合には、巻軸がそのままつぶれてしまつて厄

除すらある。一般に巻物は、あまり固く巻きしめるのは  
祭物である。

五、巻き戻しには、左手のおやゆび、人さしゆび、中ゆび  
の三本をうまく動かして、丘から右へ巻き戻してゆくわ  
けだが、右手の位置まで行き着いたら、右手許にある紙  
を左手で机上をずらしながら引き出して、右側の位置ま  
で戻り、ふたたび右の方へ巻きもちどしてゆく。それとく  
りかえず。この場合も紙と机上から離さぬことが必要  
である。

六、また巻き戻しに当って、巻物の天(上押)・地(下押)  
の両コグチをきれいにそろえるためには、右にのべた作  
業の途中で、何度となくこすめに右手の人さしゆびと中  
ゆびとで天の巻軸の両側のコグチをおさえ、同時に左手  
のおやゆびの腹で地のコグチを下から圧えるようにして  
整えよとよい。この際、時々巻軸の頭を上あるいは下か  
ら圧えるのはよいが、前述のとおり、つまんで回して  
はならぬ。

また巻物によっては、紙の継ぎかたが粗雑で、ゆがみ  
があり、コグチを整えよのは至難の場合がある。その場  
合もあまり無理はせぬことである。あまりに神経質にコ  
グチを揃えようとして指でおさえすぎると、つい紙の天  
地の端をまげたり、いためたりする危険もある。

